

県内個人消費は、自動車や家電など耐久財で買換えの動きがみられるほか、コト消費も堅調に推移。千葉駅周辺では、コト消費化にも対応した商業施設のオープンが相次ぐため、中心市街地の既存商店街等では対応が急がれる。

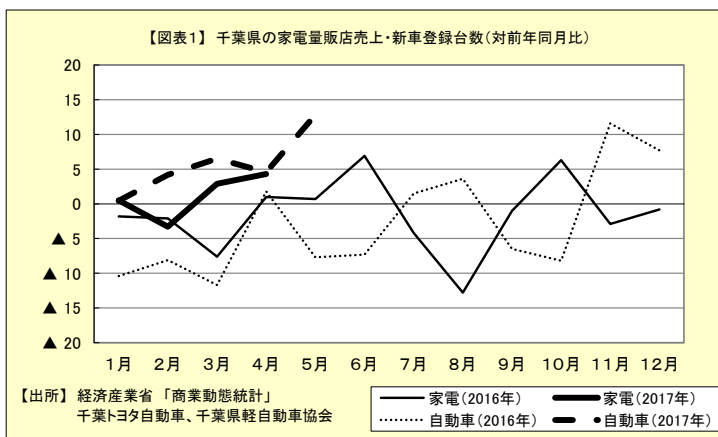
県内百貨店売上は、日用消耗品では引続き低価格志向が強いものの、株高基調の下で一部店舗で高額品売上が前年を上回っているほか、衣料品が婦人服を中心に順調な気温上昇もあって動きがみられる。また、耐久財にも明確な持直しがみられる(図表1)。理由は、需要喚起策で購入した財の買換え需要だ。県内家電量販店の売上高は、2月(閏年の裏月)を除き、前年比プラスで推移。エアコンや白物が家電エコポイント終了(2011年3月)前、テレビが地デジ移行(2011年7月)前の駆け込みで販売された財が買替えの時期を迎えている。県内新車登録台数も、新車投入効果もあって昨年11月から7か月連続で前年水準を上回っている。販売会社によると、エコカー補助金(2009年6月~10年9月、12年4~9月)利用車の買換え需要が出始めており、今後の盛上がり期待する声強い。

コト消費も引続き堅調だ。百貨店でも母の日・父の日などイベント関連需要は好調なほか、レジャー施設でも入込みが前年を上回っている先が多く、ホテルなどの稼働率も高い。

千葉駅周辺の商業施設でも、リニューアルや新規開店のタイミングで、こうしたコト消費化の流れを取込もうとする動きが目立つ。レストランやサービスが充実したポートスクエアが7月1日に開業したほか、ファッションにとどまらずホールやクリニック等を併設した複合施設となるペリエ千葉(2~7階)が9月7日にオープン。千葉そごうも、若者向けのジュンヌ館をこの秋に大規模改装しつつコト消費対応売場を増やす(図表2)。

このような動きは駅から中心市街地にかけての商業勢力図をさらに塗り替えるものとみられる。2020年頃にはパルコ跡地新ビル、22年には東口再開発ビルが竣工予定だが、当面は、駅周辺と中心市街地(パルコ・三越閉店)との人通りの格差を助長する可能性が高い。このため、千葉市では、駅と市街地を結ぶバスの運行を支援したのに続き、ここに来て、中央区役所の機能を中心街に立地する千葉市科学館(きぼーる)に移転する方針を決めた。

もっとも、それが地元商店街の売上増加に繋がるかどうかは不透明だ。伝統的な商店街はコト消費化に対応しきれていないことが多い。魅力向上で遠隔地からも増加することが期待される千葉駅周辺の顧客をもターゲットにして、消費者が回遊・買物したくなるよう街全体でのイベント実施や関係者間の連携を強めつつ、個々の店も独自の魅力ある商品やサービスを深化させることで、売上増加につなげたい。(矢野)



【図表2】 17年夏~秋の主な大型商業施設の新規開業・改装

店舗	開業・改装時期	内容
千葉ポートスクエア ポートタウン	7月1日	ラオックスによる体験型複合レジャー施設。17年12月にはエンターテインメント施設がオープンし公演を予定
ペリエ千葉 (2~7階)	9月7日	ファッションだけにとどまらず交流の場となる商業施設を目指す。屋上庭園・多目的ホール・保育園・クリニックなども併設。107店舗がオープン予定
ベイフロント蘇我	10月予定	JFEスチールの工場跡地を活用した大型商業施設「ハーバーシティ」内に建設。衣料品や飲食店など14店舗が出店
そごう千葉店	秋	食料品の人気テナントを誘致。秋にはジュンヌ館を大規模改装
東武百貨店船橋店	秋	駅前好立地を活かし、2~3階にビックカメラを誘致